平成２９年１０月２７日

平成２９年「まほろば会秋の見学旅行」資料

信州を北から南まで堪能する旅（大室古墳群・上田城・伊那谷古墳群ほか）

平成２９年１０月２７日（金）～１０月２９日（日）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行は、「信州を北から南まで堪能する旅」と銘打って、恐らく当会としては初の企画となる「信州縦断」を試みました。「大室古墳群・伊那谷古墳群」などの「古代馬匹文化」に関連する遺跡、そして鎌倉・室町期の貴重な国宝「安楽寺の八角三重塔」などを擁する「別所・塩田平」、昨年のNHK大河ドラマ「真田丸」の舞台となった「上田城・松代城（海津城）」、あの有名な「善光寺」よりも起源（元）の古い「元善光寺」、そしてそしてまほろば会秋の見学旅行ではほとんど訪問することのない「戦争遺跡」の「松代象山地下壕（松代大本営地下壕）」まで見学するという欲張った企画となりました。

旅行初日は先ず「史跡大室古墳群」の見学から始まります。長野県教育委員会作成の立派なパンフレットの表紙には「謎を秘めた日本最大の積石塚古墳群」と表現されています。幹事一同でも、高川幹事以外は今秋の候補となるまでは名前すら聞いたことがありませんでした。しかし、すごい古墳『群』なのです。位置は「長野盆地の南東部、千曲川東岸の松代町大室地区」を中心とした約２．５キロメートル四方の範囲に分布し、５世紀から８世紀につくられた総数約５００基の群集墳なのです。今回の旅行では、もちろんそのすべてを見学して回ることは出来ませんが、高川幹事の資料・説明そして長野市教育委員会埋蔵文化センター学芸員の案内で十分堪能していただけるものと確信しております。

初日には、そのほか「松代大本営地下壕」を見学しますが、ここはご存知の通り「第二次世界大戦の戦争遺跡」です。舞鶴山を中心にして皆神山・象山に碁盤の目のように掘り抜かれ、その延長は何と１０キロメートル余りにも及んでいます。驚きです。見学できるのは「延長約５００メートルの区間」ですが、それほど遠くない過去（？）に思いを馳せていただければ幸いです。

二日目には、「上田城・別所温泉・塩田平」を巡ります。「上田城」は、昨年の大河ドラマ「真田丸」の舞台でしたのでご存じない方はいないと思いますが、真田昌幸（幸村の父）の築いた名城です。もちろん関ケ原合戦直後に破却されています。現存する「櫓」は昭和２４年に再建されたものですが、真田氏の次の城主になった仙石忠政によって寛永３年（１６２６年）からの工事で再建された「櫓」の面影をよく残していると言われております。二度もの実戦の経験があって、しかも小よく大を制したこの上田城のような戦歴を持つ城は、全国でも他に例はないようです。

「別所温泉」では、「国宝八角三重塔」を有する「曹洞宗安楽寺」を見学します。一見すると「四重の塔」ではないか？と見間違うような造りです。皆さん、現物を間近でご覧になってください。しかも『八角』という珍しい塔です。乞うご期待！「塩田平の龍光院」では「精進料理」をお楽しみください。飲酒は禁じられているようですが！

最終日には武田信玄終焉の地「長岳寺」で名物住職の有難い「お説教」を聞くことが出来るようです。そのほか「伊那谷（飯田）古墳群」（平成２８年に国史跡に指定。大陸からの渡来人およびヤマト政権との関係で重要な意味がある遺跡。）「元善光寺」「諏訪大社上社本宮」など、見どころ満載です。２泊３日の「北から南まで信州を巡る旅」を十分にご堪能ください。

幹事一同

平成２９年度　まほろば会秋の見学旅行（信州を北から南まで堪能する旅）予定表

＜日程＞　平成２９年１０月２７（金）から２９日（日）までの２泊３日の旅行です。

＜集合＞　１０月２７日（金）１２時２０分までにJR「長野駅」新幹線口改札付近に集合します。

＊全員集合ののち貸切の「アルピコ交通バス」（解散まで一緒）に乗車し、下記「見学予定地」を回ります。

＜解散＞　１０月２９日（日）１９時４５分ごろ「新宿駅」にて解散します。

＜見学予定地＞

１０月２７日（金）	大室古墳群	長野市松代町大室３１０	℡026-284-0004（長野市教育委員会）
	松代大本営地下壕	同　西条４７９－１１	℡026-224-8316（長野市観光振興課）
	松代城（海津城）	同　松代４４	℡026-278-2801（真田宝物館）
	（宿泊地）上山田温泉「ホテル圓山荘」	千曲市上山田温泉２－９－６	℡026-275-1119
１０月２８日（土）	上田城（市立博物館）	上田市二の丸３番３号	℡0268-22-1274
	安楽寺	同　別所温泉２３６１	℡0268-38-2062
	常楽寺	同	℡0268-38-2040
	北向観音	同	℡0268-38-2023
	（昼食）龍光院にて精進料理	同　大字前山	℡0268-38-2561
	前山寺	同　東前山	℡0268-38-2855
	松本城	松本市丸の内４－１	℡0263-32-2902（松本城管理事務所）
	（宿泊地）飯田市「ホテルニューシルク」	飯田市錦町１－１０	℡0265-23-8383
	（宴会場）「いろはにほへと飯田駅前店」	同　中央通り４－４０	℡0265-24-5733
１０月２９日（日）	長岳寺	下伊那郡阿智村駒場５６９	℡0265-43-2967
	上郷考古博物館	飯田市上郷別府２４２８－１	℡0265-53-3755
	伊那谷古墳群		℡0265-22-4511（飯田市文化財保護係）
	元善光寺	同　座光寺２６３８	℡0265-23-2525
	（昼食）「やまだや保翁」	駒ケ根市赤穂光前寺１４７－２	℡0265-83-0141
	光前寺	同　赤穂２９	℡0265-83-2736
	諏訪大社上社本宮	諏訪市中洲神宮寺	℡0266-52-1919

まほろば会　信州旅行資料

高川　博

騎馬（馬匹）文化の受容

人類の歴史を語る上で、馬の存在は欠かせない。一説によれば、ユーラシア草原地帯のどこかで馬が家畜化されたのは五千年前であり、人間が騎乗し始めたのは三千五百年前だとされる。

三世紀の魏志倭人伝には「倭の地には牛馬無し」と書かれている。各地の馬歯・馬骨や木製鐙などの出土から四世紀には馬が渡来した痕跡が窺えるが、古墳に副葬されたハミなどの馬具類から確実に騎馬文化が流入した時期は四世紀の末である。（福岡の池ノ上古墳、老司(ろうじ)古墳、兵庫・加古川市の行者(ぎょうじゃ)塚(づか)古墳）

馬の渡来は、やはり四世紀末からの倭兵の半島関与と密接な関係にある。朝鮮半島も日本列島と同様に山がちの土地が多く、モンゴル草原などとは条件は違うが、北方遊牧騎馬民族との確執が多かった高句麗では馬の利用が進んでいたに違いない。軍事用の騎馬だけではなく運送用、農耕用にも利用価値が増えていったであろう。

倭人は高句麗との戦いの過程において、南部の伽耶（金海）や百済を通じて持続的、数次にわたる騎馬文化の伝播があった。その意味では騎馬という習俗のみに拘わらず、広く馬匹生産ということを考えるならば、馬の飼育に長けた馬養い（職人）が欠かせない、彼らは馬と共に間違いなく日本列島にやって来たのである。

この騎馬文化は急速に列島各地へ拡がりを見せ、特に長野、山梨、群馬といった高地には多くの牧が造られ馬匹生産が盛んに行なわれていた。

図１　日本列島の馬関係遺跡（古墳時代前・中期）参照

馬の海上輸送

ところで、馬を海上輸送するためにどのように対処したであろうか。朝鮮半島から日本列島へ馬を運ぶためには、海を渡ることが絶対条件となる。しかし、この問題の答えは全く分かっていないのが現状である。この時代の船は準構造船（丸木舟の舷側と前後に板を取り付けたもの）であったと推測される。

馬（小型の蒙古馬）は賢い動物ではあるが、神経質なところがあり、ストレスに弱い。
日頃大地を駆け回っている馬にとって、波に揺れる船に載せられることは彼らにとっては大変な苦痛であろう。丸木舟ベースの船は幅が狭く馬を載せる隙間はない。無理して立ったまま載せても今度は漕ぎ手のスペースが無くなってしまう。中国のように構造船（船底をはじめ全ての構造を角材や板材で造ったもの）であれば、大型で幅広の船体に馬を載せることは十分可能となるが、この時期には未だ登場していない。

考えつくのは双胴船タイプだ。二艘の準構造船を渡し木でしっかり繋ぎ、両船体の中間に馬房（小屋囲い）を設けて馬を収容すれば複数頭でも大丈夫ではないだろうか。海の上でも世話係が常に眼をかけていれば馬も安心するし中継地ごとに陸揚げし休息させればよい。

ただし、このタイプではそれぞれの船体がのっかる波は別々となるので、渡し木にかかる負荷は大きく強度の上で問題がある。また漕いで行く上でも難渋することになるので、スピードは大きく制限されることになる。しかしながら、安定性のあるこの形にすると今度は帆も利用可能という大きな利点がある。この時代の帆は横帆といって追い風の時のみしか使用できないが、それでも風待ちで時を待ち、時間をかけて順風にのって航海すれば大いに威力を発揮したに違いない。
ただし、残念ながらこのような双胴船タイプの船体の出土例はない。今のところ、福岡県の竹原古墳壁画が、そのようなタイプだとする見方があるが、確証されている訳では無い。

あと考えられるのは馬を載せるために筏(いかだ)を組み、それを船で牽引する方法である。筏には囲い柵を設けて、世話する人間も一緒に入るのだ。これだと安定した形にはなるが、極端にスピードが落ちることになる。昼間のみの明るい間に目的地へ到着しなければならないので、無事に辿り着くには結構厳しいように思われる。

大型の構造船であれば、船幅の拡大は積載量の大幅増に直結するので多数の馬の輸送も容易だが、我が国の構造船の出現は早くとも六世紀であろう。それに外洋渡海用の本格的構造船は八世紀の遣唐使船まで待たなければならない。

図２　馬の運搬と双胴船（ダブルカヌー）　参照

騎馬民族征服王朝説

騎馬文化の流入について特筆されることは、敗戦後間もない昭和二十三年に江上波夫（東大教授）によって提唱され、一世を風靡した「騎馬民族征服王朝説」がある。江上は古墳時代前期の副葬品が呪術的、農耕民的であったのに、後期になると武装具、馬具などの遊牧騎馬文化的なものに急激に変化しており、その状況は騎馬文化を持つ有力集団が朝鮮半島南部より渡来して倭国を征服した、という説を出した。（崇神・応神王朝の出現）

しかし、この説は多くの学者から批判を浴びて、今日では過去の学問として放置されているのが現状である。まず、この学説のネーミング「騎馬民族征服王朝」とは某出版社が読者受けを狙って付けたもので、未曾有の敗戦によって打ちひしがれた一般国民には新鮮な響きを持って受け止められて一大ブームとなった。しかし、その反面モンゴル帝国の元寇（大挙襲来）を想起させるような誤解を生んだことは、その後の論議に大きなマイナスの作用を生んだ。江上自身は、その渡来王朝となった勢力は扶余(ふよ)系辰(しん)王朝(おうちょう)としているが、朝鮮半島南部及び九州北部において力を蓄えつつ、漸進的な東方侵攻を遂行した、と最初から急激かつ短期的な侵略を否定していた。それにも拘わらず、という結果になってしまったのである。

しかしながら、その後の考古学の進展は彼の主張を裏付ける遺跡や遺物が沢山発見されて来た。国内での代表的な例は先述したところであるが、これらの発掘調査は全て江上説発表後のことである。さらに韓国においても近年、金海・大成洞古墳群、釜山・福泉洞古墳群などから、まさに騎馬集団の存在を強く認識させる馬具や武具が豊富に出土している。したがって、変異の状況を急激・突発的ということから、漸進的という認識に置き換えれば、今でも江上説は十分に通用する。ただ、渡来後、王権を簒奪するまでに何世代もかかったのであれば、もう彼らは倭人と呼ぶのがふさわしいのではないか、と考えられる。ここでは、この説にこれ以上深入りはしないが、いずれにしても多数の馬を載せた大船団が一挙に対馬海峡を押し渡った姿はどうやっても浮かんでこない。

図３　騎馬民族征服王朝説の新旧対比　参照

図1　日本列島の馬関係遺跡（古墳時代前・中期）

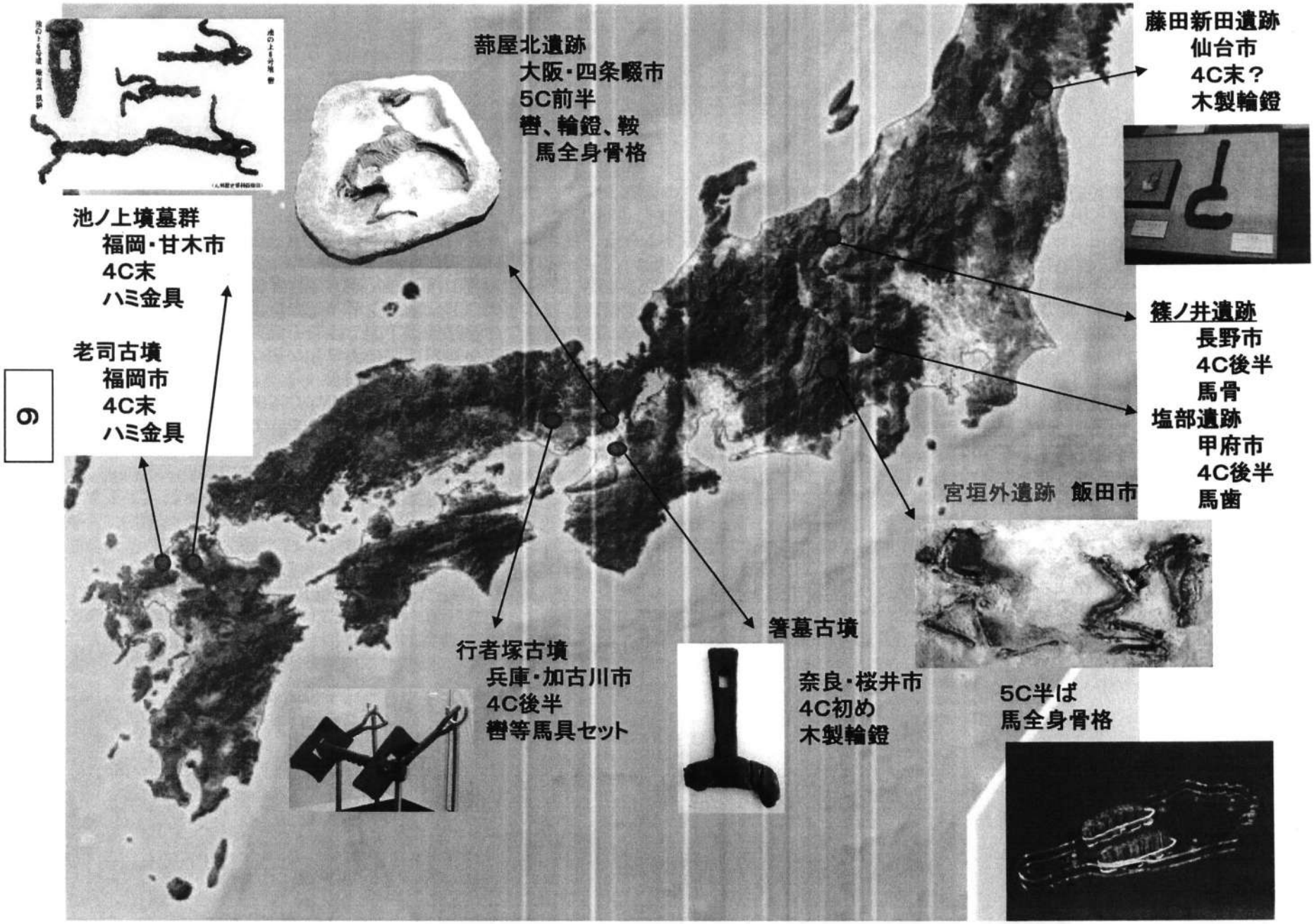


図2　馬の運搬と双胴船（ダブルカヌー）

双胴船のメリ・デメ
（メリット）
・広いスペースが確保できる。
・耐航性（安定性）が高くなる。
・帆の利用が可能

（デメリット）
・漕ぎにくい
・スピードが出ない・繋ぎ部分に負荷がかかり折れやすくなる。

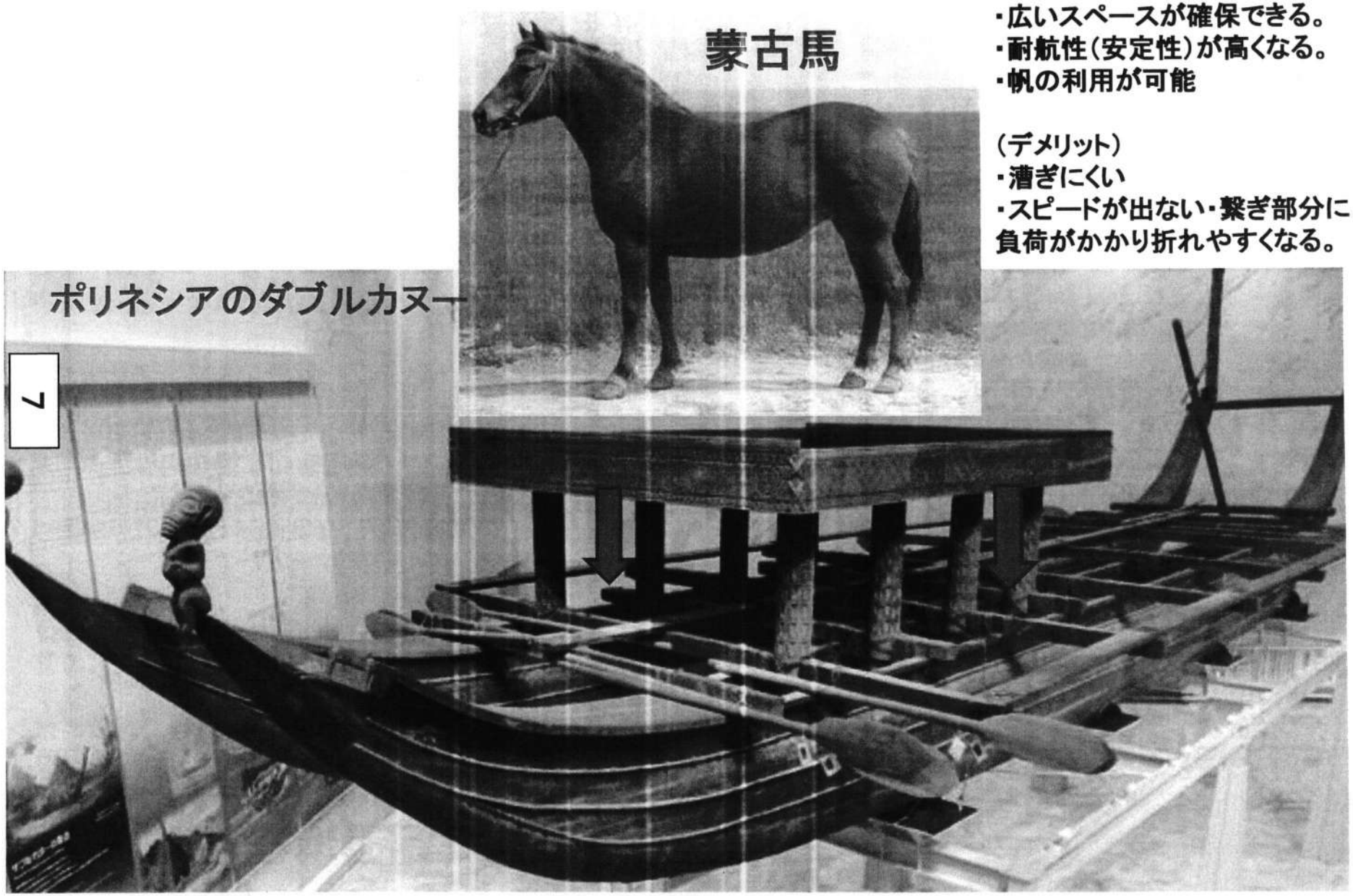


図3 騎馬民族征服王朝説

江上説の新旧対比

旧 1948年(S23年)

●4世紀前半　大陸北方系騎馬民族の一派(ツングース系扶餘の血統をひくか)が南朝鮮の倭人の地を飛び石として倭人の本拠たる日本列島(北九州)に渡来侵入して倭人を征服支配した。
その中心が天皇族(崇神)である。

●5世紀初め　渡来後1世紀足らずで北九州から近畿地方へ進出して大和朝廷を確立した。これが応神、仁徳朝である。

●征服支配には成功したものの、常に少数派であったため、漸次同化傾向にあった。

扶余隆墓誌
拓本発見
(時期？)

→

大成洞古墳
(1990年～
1992年調査)
3C後半～5C
前葉で突如中断
殉葬、馬具などの
北方文化

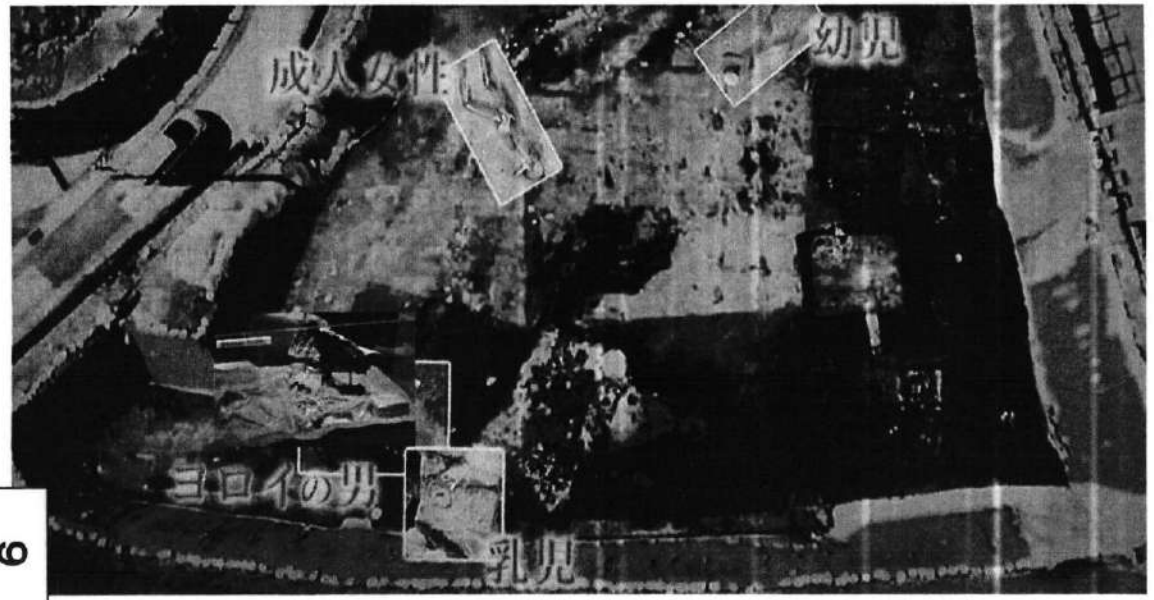
新 1995年(H7年)

●4世紀前半　朝鮮半島中部に東北アジアの扶餘系騎馬民族出身の辰(秦)王朝が成立し韓人諸国の大半を支配した。

●中心は馬韓にあったが後に弁韓に移り、最後に筑紫(北九州)に上陸した。(崇神)
当時の韓半島南部と九州の実態は倭韓連合王国であった。

●5世紀になると応神天皇が伽耶から北九州　に渡り、勢力を増して畿内へと数派に分かれて東征した。

甲（よろい）を着た男の謎　金井東裏遺跡（群馬県渋川市）



男性は身長164cm　細面　鼻筋通り　渡来系
40代後半
女性は143cm　顎がしっかり、団子鼻
古代東国人的　30代後半
二人は血縁関係には無く、4人は家族と見られる。

6世紀初頭、榛名山噴火の火砕流により地中に埋まっていた男性と成人女性、それに幼児と乳児計4人の人骨が発見された。（2012年11月）
人骨は九州大学で分析調査された。

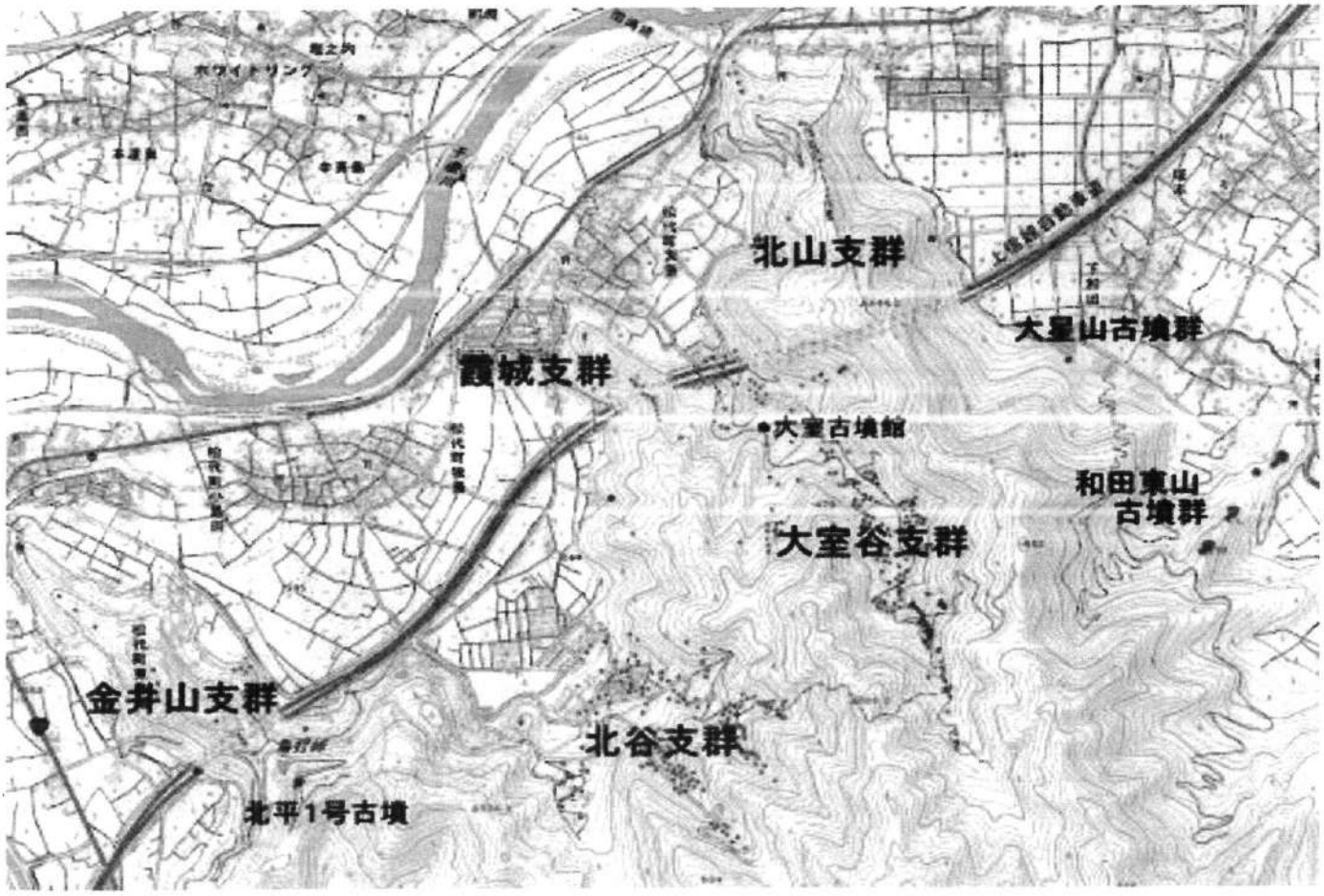
（歯のエナメル質分析による生育地推定）
歯のエナメル質には10歳位までの生育地の地下水に由来する微量な元素（ストロンチウム）が含まれており、生育地が推定できる。 二人のストロンチウム同位体を示す場所は伊那谷周辺（花崗岩質）であり、二人はここで成長し、後に群馬へ移住した可能性が高い。（幼児の歯の分析では榛名山の麓と判明）
伊那谷は古代の馬匹生産が盛んであったことで知られる。また男の大腿骨は、よく発達しており騎馬の習慣を持っていたことが推定されており、騎馬文化と深いかかわりを持っていたことが窺える。

大室古墳群

大室古墳群は長野盆地南東の山岳地帯、長野市松代町大室を中心に約２．５キロ平方の範囲に三つの尾根とそれに挟まれた二つの谷部に分かれて、総計５００余基の大規模な古墳群である。この古墳群は５世紀から8世紀の約２５０年にわたり構築され、その大部分は積石塚で中には合掌形石室を持つものもある。

全体の７～８割が積石古墳と考えられ、わが国ではまれな存在とされている積石塚が多く密集する古墳群は他には存在しないとされている。

今回は大室谷支群の史跡入り口部分の整備されているゾーンを見学します。
教育委員会文化財課「埋蔵文化財センター」の方に解説をお願いしています。
詳細は小冊子「史跡　大室古墳群（長野市教育委員会）」を参照してください。



松代大本営地下壕

象山地下壕入口

象山地下壕内部

松代大本営地下壕は、太平洋戦争末期、日本の政府中枢機能移転のために長野県埴科郡松代町（現長野市松代地区）などの山中（象山、舞鶴山、皆神山の3箇所）に掘られた地下坑道跡である。このうち現在、象山地下壕が一般公開されている。太平洋戦争以前より、海岸から近く広い関東平野の端にある東京は、陸軍により防衛機能が弱いと考えられていた。そのため本土決戦を想定し海岸から離れた場所への中枢機能移転計画を進めていた。1944年7月のサイパン陥落後、本土爆撃と本土決戦が現実の問題になった。同年同月東條内閣最後の閣議で、かねてから調査されていた長野松代への皇居、大本営、その他重要政府機関の移転のための施設工事が了承された。

初期の計画では、象山地下壕に政府機関、日本放送協会、中央電話局の施設を建設。皆神山地下壕に皇居、大本営の施設が予定されていた。しかし、皆神山の地盤は脆く、舞鶴山地下壕に皇居と大本営を移転する計画に変更される。舞鶴山にはコンクリート製の庁舎が外に造られた。また皆神山地下壕は備蓄庫とされた。3つの地下壕の長さは10kmにも及ぶ。

そのうち中心となる地下坑道は松代町の象山、舞鶴山、皆神山の3箇所が掘削された。象山地下壕には政府、日本放送協会、中央電話局、舞鶴山地下壕付近の地上部には、天皇御座所、皇后御座所、宮内省（現宮内庁）として予定されていた建物が造られ現在も残っている。

関連施設は善光寺平一帯に造られたため、「一大遷都」計画であった。上高井郡須坂町（須坂市）鎌田山には送信施設、埴科郡清野村（現長野市）妻女山に受信施設、長野市茂菅の善光寺温泉および善白鉄道トンネルに皇族住居などが計画された。また長野市松岡にあった長野飛行場が陸軍により拡張工事が行われている。

松代が選ばれた理由

大本営移動計画は後に終戦時の宮城事件に関わることになる陸軍省の井田正孝少佐が1944年1月に発案し、富永恭次次官に計画書を提出、大本営幹部会の承認を経た後鉄道省の現地調査が行われ全国に地下施設の構築計画案が決まり、大本営の建設場所に松代が選定された。計画案の選定理由は以下のとおりである。

1．本州の陸地の最も幅の広いところにあり、近くに飛行場（長野飛行場）がある。

2．固い岩盤で掘削に適し、10t爆弾にも耐える。

3．山に囲まれていて地下工事をするのに十分な面積を持ち、広い平野がある。

4．長野県は労働力が豊か。

5．長野県の人は心が純朴で秘密が守られる。

6．信州は神州に通じ、品格もある。

この案では松代に大本営、東京浅川に東部軍収容施設、愛知県小牧に中部軍収容施設、大阪府高槻に中部軍収容施設、福岡県山家に西部軍収容施設を建設するものであった。その後、この案は東條英機首相の日本政府全体の移動の意向により変更され、大規模化した。

「松代倉庫」工事として極秘に進められた工事であったものの、工事に従事した地元の日本人労働者の証言では、当時は、地元はもちろん、周辺地域の村では「大本営と天皇陛下が東京から移ってくる」という噂が広がっていたという。噂になった原因は、大規模な工事であり、長野電鉄松代駅に列車で輸送されてくる、大量の物資が住民の目に留まったからだとされる。

松代城（海津城）

太鼓門

南の櫓門

松代城は、長野県長野市松代町松代にある城跡である。元々は海津城と呼ばれていたが貝津城とも言われた。また茅津城（かやつじょう）とも言われ茅の生い茂った地であったと伝える説もある。形式は輪郭式平城。国の史跡に指定されている。

正確な築城時期は不明。戦国期には甲斐国の武田晴信（信玄）が信濃侵攻を開始し、北信豪族を庇護した越後国の長尾景虎（上杉謙信）との北信・川中島地域をめぐる川中島の戦いへと発展する。千曲川河畔の海津城は川中島地域の拠点城郭として整備され、『甲陽軍鑑』に拠れば武田氏は北信国衆である清野氏の館を接収し、武田家足軽大将の山本勘助に命じて築城された。

文書上においては海津城の築城は1559年（永禄2年）から開始され、翌年には完成している。築城は屋代氏、香坂氏ら川中島四郡（更級郡、埴科郡、高井郡、水内郡）の国衆が担ったという。

海津城は東条城・尼飾城とともに上杉氏への最前線に位置する。永禄4年（1561年）9月に上杉氏が川中島へ侵攻すると、海津城の城代である武田家臣・春日虎綱(高坂昌信）は海津城において篭城し信玄本隊の到着を待ち、9月10日には八幡原において両軍の決戦が行われたという（第四次川中島の戦い）。

天正10年（1582年）3月の武田氏滅亡後には、武田遺領のうち信濃川中島四郡を支配した織田氏家臣の森長可の居城となる。同年6月に本能寺の変が起こると長可は信濃を放棄して退却することを決断し、海津城の人質を盾にして美濃へと退却し海津城も無人のまま捨て置かれた。以後は空白地帯となった信濃へと侵入した上杉氏の支配となったが、1598年（慶長3年）に上杉景勝が会津に転出の後は豊臣秀吉の蔵入地となり、城主には田丸直昌が任じられた。

甲州流築城術の特徴を強く持ち、武田氏築城の代表的な城の一つである。千曲川を背後に控え、本曲輪を三方から二の曲輪が囲み、甲州流築城術の特徴である丸馬出および三日月堀を有す。

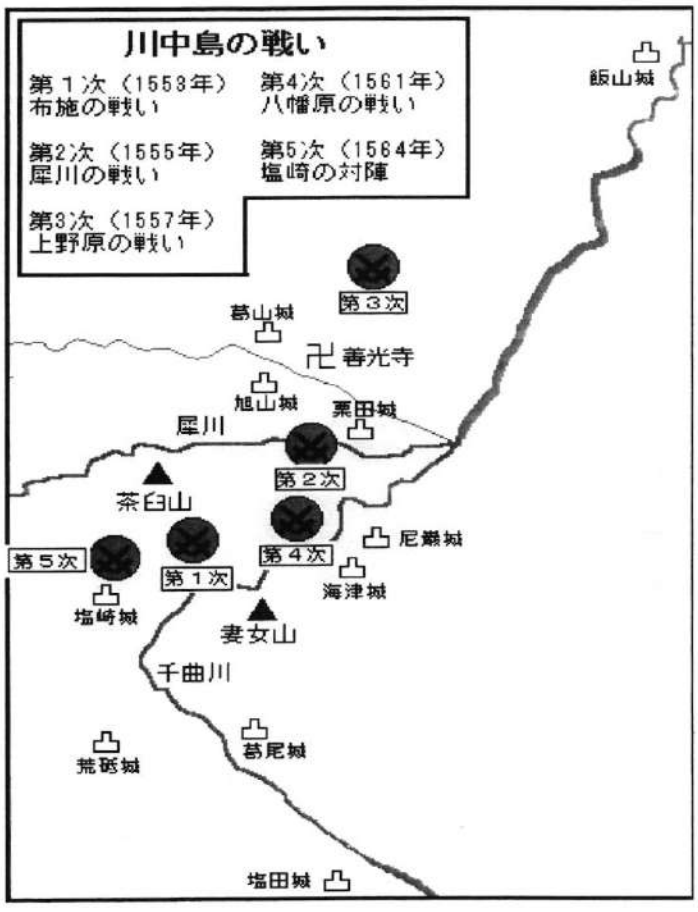
1600年（慶長5年）2月に田丸直昌4万石と領地を交換する形で森忠政が13万7500石で兄の森長可所縁の土地へ入封し、同時に豊臣家の蔵入地9万石は廃止された。この時、海津城から待城（まつしろ）へと改名された。1616年（元和2年）松平忠輝改易。代わって松平忠昌が12万石で入り、この忠昌領主時代に待城から松城へと改名された。1622年（元和8年）真田信之が13万石で入城。以後、松代藩の藩庁として明治維新まで真田氏の居城となった。1711年（正徳元年）幕命により松代城と名を改められた。

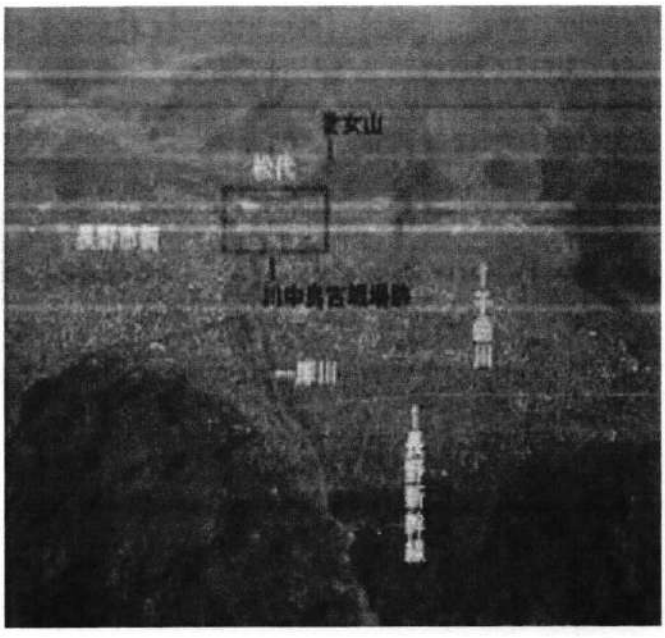
1964年（昭和39年）本丸を中心とした城址の一部が県の史跡に指定。1981年（昭和56年）本丸を中心とした城址の一部と新御殿が国の史跡に指定。2004年（平成16年）太鼓門、堀、石垣、土塁などが復元され、2006年（平成18年）4月6日に日本100名城（26番）に選定された。

川中島古戦場

長野市小島田町にある。越後：上杉正虎　甲斐：武田晴信軍による川中島の戦い・第四次合戦（八幡原の戦い）において、武田軍が本陣をこの付近に置いたとされている。
実際に両軍が激突した最前線はこの地から２～３キロ西方にあるとされている。

川中島の戦いは今から約４００年前、天文２２年（１５５３年）から永禄７年（１５６４年）計５回、１２年余りに及ぶと言われている。（諸説あり）
一般的に「川中島の戦い」と言った場合、永禄４年（１５６１年）に行われた最も大規模で激しかった「第四次合戦」を指している。「八幡原の戦い」とも言う。正虎３２歳、晴信４１歳であった。
両将の戦術は幾多の戦術研究の指針として応用されたと言われている。
武田の居城「海津城」（松代城）は南東４キロ、また頼山陽の「鞭静粛々夜渡河」で有名な雨宮渡は東側を流れる千曲川の上流約６キロの地点である。





上 田 城

上田城は、1583年（天正11）に信濃国小県の真田本城主の真田昌幸により築城された平城である。城の南を流れる千曲川、北と西に流れる蛭沢川、矢出沢川を総構えとし、地形を上手く防御に利用していた城である。1585年（天正13）と1600年（慶長5）の二度にわたる真田氏と徳川軍との上田合戦で知られている。しかし、関ヶ原の戦いで真田昌幸・信繁（幸村）が属した西軍が敗れ、昌幸・信繁が九度山に配流となると、1601年（慶長6）に徳川家康は上田城を破却し、堀も埋められた。関ヶ原以降に同地を領した真田信之（信幸改め）は、1621年（元和7）に徳川幕府に対して城の再整備・拡張を申請するが却下され、1622年（元和8）9月には信濃国松代へ転封された。

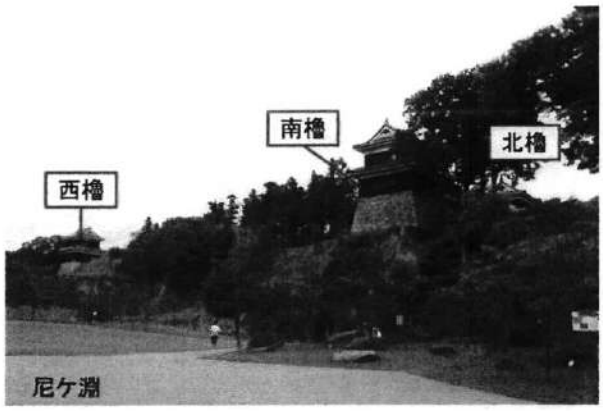
信之の移封後、上田には小諸藩より仙石忠政が入り、忠政は破却されたままになっていた城の再建を申請し、1626年（寛永3）から新しく上田城を築城した。しかし、築城の途中で忠政は亡くなり、堀や石垣の普請と本丸の櫓や城門が完成した時点で工事は中断した。

1706年（宝永3）、仙石氏に代わって松平忠周が入り、松平氏が統治したまま明治維新を迎えた。

上田城の第一の見所は、「尼ケ淵」と呼ばれた南の断崖である。氾濫を繰り返した千曲川の河岸段丘、その崖に築かれた石垣と、そこに聳える南櫓、西櫓を下から眺めるのは壮観である。

1600年（慶長5）、徳川秀忠は関ヶ原に向かう途中、3500人が立てこもる上田城を10倍以上の兵力をもって攻めたにもかかわらず敗北し、関ヶ原の戦いに遅参して家康の逆鱗に触れる原因となった（第2次上田合戦）。

真田時代の城は破壊されたが、いたるところに当時の痕跡が残る。本丸跡に建つ真田神社は歴代の城主（真田氏、仙石氏、松平氏）を御祭神としている。

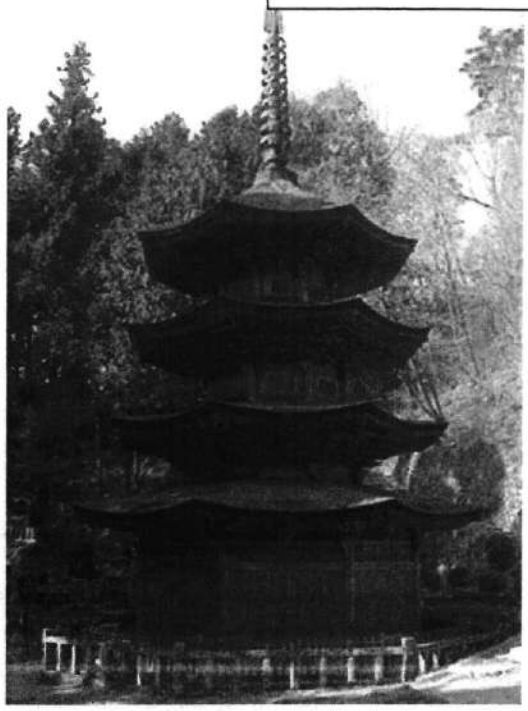


① 第２次上田合戦で敗北した徳川秀忠が関ヶ原の戦いに遅参したことによって徳川家康の戦後処理に大きな誤算が生じた。それは何か。

② 関ヶ原の戦いでは、真田昌幸、信繁は西軍、信幸は東軍と親子兄弟が袂を分かち、離別した。この別れを、その話し合いをした場所から、「〇〇の別れ」という。

（答え）①秀忠が率いていた徳川本隊の主力部隊が戦に参戦できず、外様大名に対した勝利であったため、戦後の論功行賞で東軍の外様大名の領地を優遇せざるを得なかった。　②犬伏の別れ（犬伏は現在の栃木県佐野市）

別所温泉　安楽寺



国宝八角三重塔

安楽寺扁額

安楽寺は長野県上田市別所温泉にある曹洞宗の寺院。山号を崇福山と称する。院号は護国院。開山は樵谷惟仙（しょうこくいせん）。本尊は釈迦如来。国宝の八角三重塔があること、また長野県で最古の禅寺であることで知られる。

伝承では天平年間（729 － 749年）、行基の建立とも言い、平安時代の天長年間（824 － 834年）の創立とも言うが、鎌倉時代以前の歴史は判然としない。安楽寺の存在が歴史的に裏付けられるのは、鎌倉時代、実質的な開山である樵谷惟仙が住してからである。樵谷惟仙は、信濃出身の臨済宗の僧で、生没年ははっきりしないが、13世紀半ばに宋に留学し、著名な禅僧の蘭渓道隆（鎌倉建長寺開山）が来日するのと同じ船で寛元4年（1246年）、日本へ帰国したという。2世住職の恵仁は宋の人で、やはり樵谷惟仙が日本へ帰国するのと同じ船で来日した。

鎌倉時代の安楽寺は塩田荘を領した塩田流北条氏の庇護を得て栄えたが、室町時代以降衰退し、古い建物は八角三重塔を残すのみである。室町時代、天正8年（1580年）頃、高山順京（こうざんじゅんきょう）によって再興され、以後曹洞宗寺院となっている。

境内には、著名な八角三重塔の他、本堂、庫裏、坐禅堂、経蔵、傳芳堂（文化財収蔵庫）などがある。

八角三重塔は境内奥の山腹に建つ。昭和27年3月29日に松本城とともに、長野県内の建造物として最初の国宝指定を受ける。日本に現存する近世以前の八角塔としては唯一のものである（八角塔は京都法勝寺、奈良西大寺などに存在したが、戦乱などで失われた。）。全高（頂上から礎石上端まで）18.75メートル。構造形式は八角三重塔婆、初重裳階（もこし）付、こけら葺である（四重塔にも見えるが一番下の屋根はひさしに相当する裳階である。）。この塔は日本に現存する唯一の八角塔であるとともに、全体が禅宗様で造られた仏塔としても稀有の存在である。

組物（軒の出を支える構造材）を柱の上だけでなく柱間にも密に配する点（詰組）、軒裏の垂木を平行線状でなく放射状に配する点（扇垂木）、柱の根元に礎盤を置く点、頭貫（かしらぬき、柱頭を貫通してつなぐ水平材）の端に木鼻（彫り物）を施す点など、細部に至るまで禅宗様で造られている。内部の天井の形式や八角の仏壇も他に類を見ないものである。内部には禅宗寺院には珍しく大日如来像が安置されている。

この塔の建立年代は、従来、漠然と鎌倉時代末～室町時代始め頃と考えられていたが、2004年奈良文化財研究所埋蔵文化財センター古環境研究室による年輪年代調査の結果、この三重塔の部材には1289年（正應2年）に伐採した木材が初重内部の蝦虹梁に使われていることが判明した。このことから当塔は13世紀末、1290年代に建築されたものと考えられ、1320年建築の功山寺仏殿を凌ぐ日本最古の禅宗様建築である可能性が高くなった。

2011年11月に屋根の葺き替えは60年ぶり、頭頂部金具の修理は100年ぶりとなる大規模な修復工事が行われた。

別所温泉　常楽寺

本堂

石造多宝塔（国重要文化財）

常楽寺は北向観音堂が建立された天長2年（825年）、三楽寺（長楽寺、安楽寺、常楽寺を指して三楽寺という。長楽寺は焼失し北向観音堂の参道入口に碑を遺すのみとなっている。）の一つとして建立された。

北向観音の本坊であり、本尊は『妙観察智弥陀如来（みょうかんざっちみだにょらい）』で全国的にも珍しい阿弥陀仏。

その後、正応5年（1292年）4月、信乃国（信濃国）塩田別所常楽寺で書写されたと記述のある「十不二門文心解）」が金沢文庫に遺されており、また、本堂裏の北向観音の霊像が出現した場所には、弘長2年（1262年）の刻銘のある石造多宝塔（重文）が保存されていて、鎌倉時代に天台教学の拠点として大いに栄えた常楽寺の歴史を証する貴重な文化財となっている。石造多宝塔のすぐれたものは全国的にも少なく、わが国で重要文化財に指定されているものは、この常楽寺塔と滋賀県の「少菩提寺塔（しょうぼだいじとう）」の二つだけ。少菩提寺塔は多宝塔本来の形とやや異なるので、常楽寺塔は最も大切な遺品と考えられている。

階段を上がって最初に目に飛び込んでくるのは茅葺の本堂。平成15年に修復工事を行った際、建立当時の建築様式に改めた。堂内には当時そのままの色彩を残す格天井が美しい。

別所温泉　北向観音

北向観音は、長野県上田市の別所温泉にある天台宗の寺院。近隣にある天台宗常楽寺が本坊であり、その伽藍の一部として同寺が所有・管理する。寺伝によれば、平安時代初期の天長2年（825年）円仁（慈覚大師）によって開創されたという。800年代にも火災の伝説が残る。安和2年（969年）平維茂によって大伽藍として大改修が行われたが、木曽義仲の兵火により焼失したのち、源頼朝により再興。

鎌倉時代の建長4年（1252年）には北条国時（塩田陸奥守、塩田国時）によって再建されたと伝えられる。江戸時代に至って正徳3年（1713年）に焼失し、8年後の享保6年（1721年）に現在の堂が再建された。その後度々修復を加え、昭和36年に増改築を施し、善光寺の本堂と同じ「撞木造り」となる。

北向観音という名称は堂が北向きに建つことに由来する。これは「北斗七星が世界の依怙（よりどころ）となるように我も又一切衆生のために常に依怙となって済度をなさん」という観音の誓願によるものといわれている。また、善光寺が来世の利益、北向観音が現世の利益をもたらすということで善光寺のみの参拝では「片参り」になってしまうと言われる。

観音堂に隣接する温泉薬師瑠璃殿は火災の後、文化6年（1809年）に地元の薬師講により再建された。

愛染堂の近くに縁結びの霊木として崇められている愛染かつらの巨木がある（樹高22m）。

前山寺

真言宗智山派の寺院。山号は獨股山または独鈷山。本尊は大日如来。寺名は「ぜんざんじ」と呼ばれることもあるが、正式には「ぜんさんじ」。

弘仁年中（８１２年）弘法大師空海が護摩修行の霊場として開創したと伝えられている。当初、法相宗と三論宗を兼ねていたが、元弘年中（１３３１年）讃岐国善通寺より長秀上人が訪れ、現在の地に「前山寺」を開山したとされる。

貞享年中（１６８４年～１６８７年）に真言宗智山派に改宗した。

三重の塔

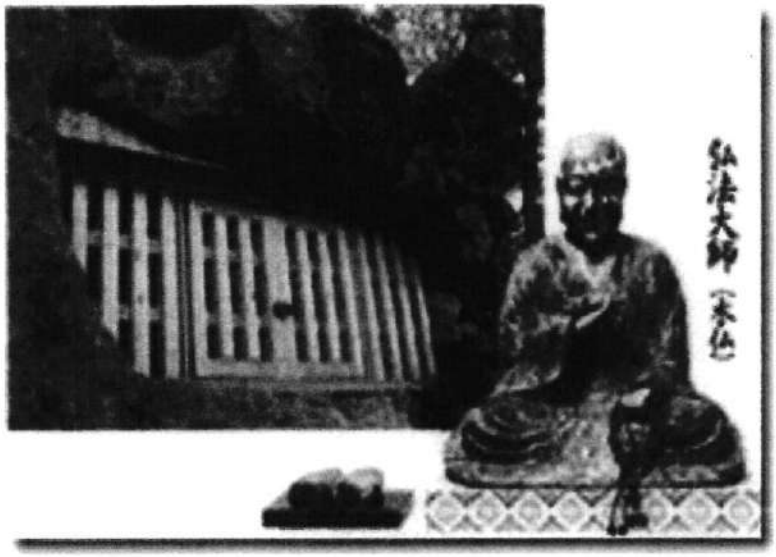
国の重要文化財。和様・禅宗様の折衷様式。建立年代ははっきりしないが様式上は室町時代初期と推定されている。近年では昭和１１年には解体修理、平成１０年に修理が行われている。塔は三間三重で高さ１９．５メートル、屋根は柿（こけら）葺きである。また、窓や扉もなく、廻廊（かいろう）も勾欄（こうらん）もない。しかし、長い胴貫が四方に突き出し、うまく変化と調和を持たせていることから「未完成の完成の塔」と呼ばれている。

相輪は鋳鉄製で格狭間付路盤（こうはざまつきろばん）、伏鉢（ふくばち）、請花（うけばな）九輪、水煙、竜車、宝珠よりなる。内部には四天柱（中心柱の周囲にある柱）がない。

本堂

本尊は大日如来が安置。
間口十間、奥行は八間木造萱葺。

奥の院



岩屋堂と呼ばれ、前山寺の奥の院として、岩屋の中に弘法大師が安置されている。護摩修行の霊場であったとされる場所である。寛政５年（１７９３年）、この山を穿（うが）ち、西国三十三番観音を祀り、近隣の信仰を集めた。

明治になり盗難・破壊が相次ぎ、当寺に移された。

平成５年（１９９３年）石造の観音像が復元された。

龍光院

曹洞宗　本尊は釈迦牟尼

創建は弘安５年（１２８２年）、塩田北条国時が父である義政の菩提を弔うため開山したのが始まりとされている。塩田北条氏の菩提寺として庇護され、「信州の鎌倉」とも言われた文化の中心的寺院として隆盛した。

元弘３年（１３３３年）、新田義貞が鎌倉を攻めた際、幕府側として行動したためか、塩田北条氏一族が滅び、その後は庇護者を失い衰退します。

慶長６年（１６０１年）萬照寺六世瑞応が中興開山し当初の寺号であった「仙乗寺」を「龍光院」と改めた。建長寺（鎌倉）から萬照寺（更埴）の末寺となっています。享保１７年（１７３２年）の火災で多くが焼失し、享保２０年（１７３５年）に再建された。

本堂は寄棟，銅板葺、外壁は真壁造、白漆喰仕上げ、腰壁は縦板張。

文化財として

花鳥人物屏風･･･江戸時代後期、狩野永琳筆。

ケヤキ･･･樹齢約３００年　（いずれも上田市指定）

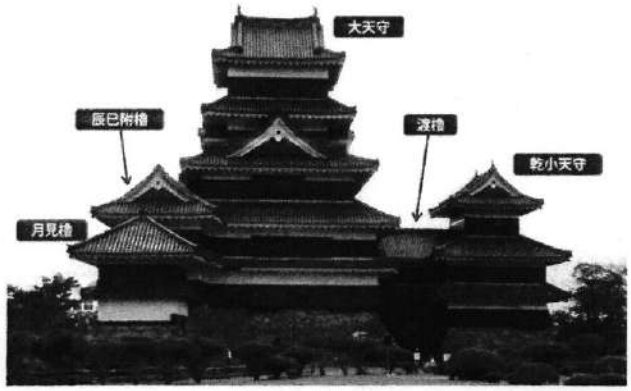
松 本 城

松本城は永正年間(1504～1520)初めに造られた深志城が始まりである。戦国時代になり世の中が乱れてくると、信濃府中といわれた松本平中心の井川に館を構えていた信濃の守護小笠原氏が、館を東の山麓の林地区に移すと、その家臣らは林城を取り囲むように枝城を構えて守りを固めた。深志城もこの頃に林城の前面を固めるために造られた。その後甲斐の武田信玄が小笠原長時を追い、この地を占領し信濃支配の拠点とした。その後天正10年(1582)に小笠原貞慶が、本能寺の変の動乱の虚に乗じて深志城を回復し、名を松本城と改めた。

豊臣秀吉は天正18年(1590)、小田原城に北条氏直を下し天下を統一すると、徳川家康を関東に移封した。この時松本城主の小笠原氏は家康に従って下総へ移ると、秀吉は石川数正を松本城に封じた。数正・康永父子は城と城下町の経営に力を尽くし、康永の代には天守3棟(天守、乾小天守、渡櫓)はじめ、御殿・太鼓門・黒門・櫓・堀などを造り、本丸・二の丸を固め、三の丸に武士を集め、また城下町の整備を進め、近世城郭としての松本城の基礎を固めた。天守の築造年代は文禄2年から3年(1593～1594)と考えられる。

慶長18年(1613)石川氏に代わって小笠原氏が入封、以降は戸田氏、松平氏、堀田氏、水野氏と城主が続き、享保11年(1726)戸田氏が鳥羽から入封し、幕末を迎えた。

徳川幕府が崩壊した明治の初め、旧物破壊の風潮の中で多くの天守が失われた。松本城も破却の運命に晒されるが市川量造らの奔走によって破却を免れた。しかしその後城は荒廃し、明治30年頃には倒壊寸前になっていた。この有様を憂えた松本中学校長小林有也らは明治34年に松本城天守閣保存会を設立して明治の大修理を行い、大正2年に完成させた。昭和11年4月には「国宝保存法」によって天守ほか4棟が国宝(旧国宝)に指定され、「国宝保存法」に代わって「文化財保護法」が施行された戦後、昭和27年3月29日に天守5棟(大天守、乾小天守、渡櫓、辰巳附櫓、月見櫓)が国宝に指定された。



① 松本城天守は、構成形式の分類では「○○○○式天守」にあたる。

② 松本城天守は、構造は「○○型」でありながら、外見は「○○型」のように見える珍しい天守である。

(答え) ①複合連結 ②望楼、層塔

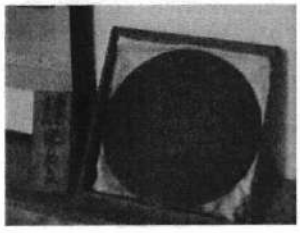
武田信玄終焉史跡　長岳寺

信玄公は野田城（松平出城）攻めの最中に肺患を得、病が重くなり三河から信州伊奈を経ての帰途、天正元年4月12日信州伊奈の里、駒場の山中で落命しました。享年53歳。映画等では、野田城攻めの際、松平側が放った鉄砲により死去との説がありますが、それは間違いとのことです。信玄公の義理の兄弟、下条家出身の六世・裕教法印が長岳寺の住職であったことから、信玄公の遺骸がそっと運び入れられました。その際、影武者をたて信玄公は生きているものとされました（次ページ参照）。その後、長岳寺を守っていた馬場信春、原備前、高坂弾正、下條伊豆守等により、遺骸をお骨にしてこっそり持ち帰ったとのことです。

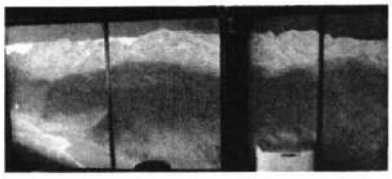
昭和49年、信玄公400年祭の折、火葬塚より火葬灰を境内に移し供養塔として十三重塔が建立されました。

長岳寺本堂

信玄使用の兜の前立て（鍬形台三輪菊唐草透彫三鈷柄付・大日の丸練革製朱塗）
昔は近所の子供の遊び道具になっていたようです。



見どころ：平成23年、阿智村在住の日本画家吉川優氏より、襖絵が奉納されました。一見の価値有りです。



参考:信玄公遺言

甲陽軍鑑によれば信玄公死去直前に次のような遺言を残したという。

5年以上前から病気が重大であると認識しており、判を書いた白紙を800枚余用意してあるので各地から書状が来たらこの紙を使うように。

信玄が病気であるとはいえ存命であると聞けば信玄に領国を攻められぬ用心をするのが精一杯であろうから3年間は自分の死をかくして領国の安全を保つこと。

自分の後継者は勝頼の息子信勝が16歳になったら家督を譲るのでそれまでは四郎勝頼に陣代を申しつける。しかし勝頼に武田累代の旗を持たせてはならない。孫子の旗、将軍地蔵の旗、八幡大菩薩の旗、いずれもすべて持たせてはならぬ。

信勝が16歳で家督を継ぎ、初陣のおりには孫子の旗だけを残し、それ以外はすべて持って出陣せよ。

勝頼は前のように大文字の小旗を持ち、差物、法華経の母衣は典厩(信豊)に譲ること。諏訪法性の甲は勝頼が着用し、その後信勝に譲ること。

典厩信豊、穴山信君両人は信玄が頼りにしていることゆえ、四郎を屋形のようにもりたててほしい。7歳になった信勝を信玄のように重んじて16歳になったときに家督にすえてほしい。

自分の葬儀は無用であり、遺体は3年後の4月12日に甲冑を着せて諏訪湖に沈めてほしい。

勝頼は謙信輝虎と和議を結ぶように。謙信は男らしい武将であるから若い四郎を苦しめるようなことはしないであろう。まして和議を結んで頼るというのであれば決して約束を破ることはないであろう。信玄は大人気なく謙信に頼ることをしなかったためついに和議を結ぶことはなかったが、勝頼は必ず謙信に敬意を表して頼りにするのがよい。謙信はそのように評してよい人物である。

信長が攻めてきた場合は難所に陣を張って持久戦に持ち込めば敵は大軍で遠路の戦いであるから五畿内、近江、伊勢の部隊は疲労して無謀な戦いを挑むであろうからその機会に一撃を加えて破れば敵は立ち直ることはできないであろう。家康は信玄が死んだと聞けば駿河に攻めてくるであろうから駿河に引き込んでから討ち取るように。小田原の北条氏政は強引に攻めて押しつぶすのに手間どることはないであろう。氏政は信玄が死んだと聞けば人質を捨てて裏切り敵となるであろうからその覚悟をしておくように。

弟の逍遥軒信廉は今夜甲府に使いに行くといって4人を連れて出るふりをして従者たちを土屋右衛門尉のところに預け輿に逍遥軒を乗せ、信玄公は病気のため甲府に戻るといえば信玄と逍遥軒とを見分けることができる者はいないであろう。

四郎はくれぐれも好戦的に振舞ってはならない。そして信長、家康の運の尽きることを待つことが重要である。もし敵が無理な戦いをしかけてきたら、わが領土に引き入れ必勝の決戦を挑むこと。そのときに皆が一体となって奮闘すれば、信長、家康、氏政の3人が連合してこようともこちらの勝利は間違いない。

輝虎については他の者と謀って四郎を苦しめることはありえない。武勇においては信玄が死んだのちは謙信である。天下を手にした信長と武勇日本一の謙信、この両人の運が尽きるのを待つこと。四郎は万事についての思慮、判断、将来への見通しについて信玄の10倍も心するように。但し敵が侮って挑んできたら甲斐の領内まで引き入れて耐えぬいて合戦をするなら大勝利を得られるであろう。決して軽率な戦いをしてはならないと馬場美濃守、内藤修理、山県昌景に指示した。

(甲陽軍鑑より)

飯田 古墳群

①平成28年、飯田地区の11基の前方後円墳と2基の帆立貝形古墳が国史跡に指定されました。
国の史跡指定の古墳は全長100㍍以上が基準ですが、飯田にはそんな古墳はありません・・・
それでも指定されたのは、渡来人（大陸）及び、ヤマト政権との関係で重要な意味があるということです。

②一般的に4世紀後半までの古墳からは、呪術的威信財である鏡・剣・玉が出土しますが、5世紀に入り、武具・馬具等（騎馬民族的なもの）に変わります。何故でしょうか？
A.4世紀末～5世紀初頭にかけて、倭は百済・任那と組んで高句麗との厳しい戦いを強いられ、挙句の果てに百済が475年に滅亡（第1次滅亡・本格的滅亡は660年）し王まで殺されました。この経験により、ヤマト政権はその後強力な武器である馬の飼育を大々的に推し進めました。

③ヤマト政権は馬の飼育地として、主に伊那谷・尾張東部（東濃）・下野（栃木）・上野（群馬）・北信等に目をつけました。何故でしょうか？
A.広大な大地があり、農耕に不向きな河岸段丘地や火山灰台地が選ばれました。

④駿河・相模・南武蔵・南東北等が5世紀前半～中葉にかけて大型古墳の築造を停止するのに対し、伊那谷・東濃・下野・上野等では、同時期より大型古墳の築造が開始されます。何故でしょうか？
A.馬匹生産により、馬の輸送の必要が生じましたが、従来の海の道(船)では馬の輸送が難しいので山の道の重要性が増し、当地方が発展しました。では、当時何故船では馬を運べなかったのでしょうか？
A2.当時の船はまだ小規模であり、狭い所を嫌う馬の輸送に適していませんでした。また、大波による危険もありました。

当時の倭船を復元

⑤当時の馬はどんな馬？
A.所謂サラブレッドの様な格好良い馬ではなく、体高120cm程度のずんぐりとした短足の蒙古系の馬です。
馬匹生産には、鉄（馬具）と塩（草食の馬にはナトリウム摂取が大事）生産が欠かせませんが、南信では未だ鉄・塩関連の遺跡は発見されていません。必要に応じ他所から運び込まれたのでしょう。ただ、群馬では最近鉄生産の遺跡が発見されたようです。

⑥ヤマト政権より馬匹生産のため、伊那谷・下野・上野・東濃等に渡来人が派遣されました。何故渡来人が必要だったのでしょうか？
A.倭人には、馬匹生産の技術がありませんでした。繁殖（種付け）、育成、調教等の技術は大陸が優れていたので、渡来人の需要があったものと思われます。

⑦南信の古墳の特徴は？
A.・伊那谷には、数多くの単独の首長墳（前方後円墳）が築造されており、逆に渡来人は勿論一般人の古墳もありません。これは、従来身分差の余り無かった社会だったものが、トップだけが馬匹生産を通じてヤマト政権と結びつき大きな古墳を造ったのではないかと思われます。
ただ、多くの須恵器・竈付き住居・馬犠牲抗が発見され、これが渡来人の存在を証明しています。（因みに渡来人の古墳は、積石塚（方墳）：百済と高句麗は同族であり、高句麗の冬は-40度となる凍土、ここでは土より石の方が積み易い⇔倭墳は封土墳（円墳））、但し倭墳でありながら、一部に積石塚の例もあります（高松の石瀬尾山古墳群、福岡の相の島古墳群等）。
・「相似形古墳」・・・日本の古墳は、畿内との関係・地位による相似形です。そして、前方後円墳は譜代、前方後方墳は外様と言えます。南信の古墳は小規模な前方後円墳が多く、その立場が想像できます。

⑧大陸との関係で北信との違いは？
A.北信→他より早く4世紀末には積石塚が構築されています（被葬者に倭人含む）。築造数が飛躍的に増加するのは5世紀後半の大室古墳群から。500基中400基が積石塚（形は倭墳の特徴である円墳）。6世紀以降封土墳に変化。倭人も渡来人も区別なく早くから交流していたものと思われます。
南信（下野・上野・東濃等も同じ）→5世紀後半、中央政府の政策による渡来人入植。

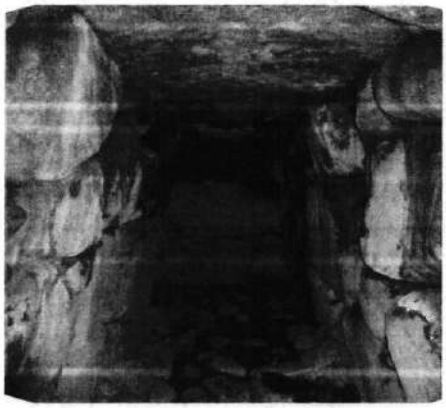
御猿堂古墳

6世紀前半の全長66㍍の前方後円墳です。代表的な首長墓の一つ。
無袖式の横穴式石室で、重要文化財に指定された画文帯四仏四獣鏡が出土しました。

向かって右手が後円部で左手の平らな面が前方部

画文帯四仏四獣鏡

後円部南西側にある横穴式石室
後円部　径31．4㍍　全長13㍍



馬背塚古墳

6世紀代の全長46㍍の前方後円墳で二つの石室を持つ珍しい古墳です。
後円部は無袖式、前方部は両袖式の横穴式石棺。

羨道部　羨道長5．5㍍　幅2㍍　高さ1．6㍍

この前方部の
石室が後から
造られたらしい

玄室
玄室長6．4㍍　幅3㍍強
高さ3．3㍍　大きい

玄室から開口部
両袖式
側壁の石材が大きい

元善光寺

元善光寺はその名の通り、長野の善光寺の大元のお寺です。

古くはこの地を麻績の里（おみのさと）と呼びました。推古天皇10年（602年）にこの地の住人本多善光が、難波の堀江（大阪市）で一光三尊（善光寺如来）の本尊を見つけ（当時物部氏と曽我氏との争いによって難波の堀に沈められていた）持ち帰り、麻績の里の自宅の臼の上に安置したところ、臼が燦然と光を放ったことから、ここを「坐光寺」としたと言われています。

その後、皇極天皇元年（642年）、勅命により本尊は芋生の里（長野市）へ遷座され、このお寺が善光の名をとって善光寺と名付けられたことから、坐光寺は元善光寺と呼ばれるようになりました。

遷座された本尊の代わりに勅命により木彫りの本尊が残され、また「毎月半ば十五日間は必ずこの故里（飯田）に帰り衆生を化益せん」というお告げが残されたことで、「善光寺と元善光寺の両方をお詣りしなければ片詣り」と言われています。

ご本尊

＜見どころ＞
・お戒壇巡り
・座光の臼（宝物殿）
・ご本尊
・御涅槃像（宝物殿）
・平和の鐘
・平和殿

ただ、今回の旅行では宝物殿には寄りませんので、各自機会があったら是非見てください。

元善光寺本堂

光前寺

開基本聖上人は、比叡山にて研学修行の後、太田切黒川の瀑の中より不動明王の尊像を授かり、この地に寺を開かれました。以来千百余年の長い歳月の間には幾多の火災等により古記録を焼失しました。古くは武田・羽柴家等の武将の保護を受け、特に徳川家からは地方寺院としては破格の六十石の寺領と十万石の大名格を与えられるなど、隆盛をきわめました。

明治以降は、多くの末寺等も廃寺となりましたが、今なお樹齢数百年の杉の巨木に囲まれた境内には、十余棟の堂塔を備え、長野県下屈指の大寺であり、南信州有数の祈願霊場として広い信仰をあつめています。

本堂

三重塔

光苔

＜見どころ＞
・光苔
・三重塔（長野県・県宝）
・弁天堂（重要文化財）

弁天堂

霊犬　早太郎伝説（れいけん　はやたろうでんせつ）

今よりおよそ700年程も昔、光前寺に早太郎というたいへん強い山犬が飼われておりました。

その頃、遠州府中（静岡県磐田市）見付天神社では田畑が荒らされないようにと、毎年祭りの日に白羽の矢の立てられた家の娘を、生け贄として神様に捧げる人身御供という悲しい習わしがありました。

ある年、村を通りかかった旅の僧である一実坊弁存（いちじつぼうべんぞん）は、神様がそんな悪いことをするはずがないと、その正体をみとどけることにしました。祭りの夜にようすをうかがっていると、大きな怪物が現れ『今宵、この場に居るまいな。早太郎は居るまいな。信州信濃の早太郎。早太郎には知られるな』などと言いながら、娘をさらっていきました。

弁存はすぐさま信州へ向かい、ようやく光前寺の早太郎をさがし当てると、早太郎をかり受けて急ぎ見付村へと帰りました。

次の祭りの日には、早太郎が娘の代わりとなって怪物と戦い、それまで村人を苦しめていた怪物（老ヒヒ）を退治しました。早太郎は化け物との戦いで傷を負いましたが、光前寺までなんとか帰り着くと、和尚さんに怪物退治を知らせるかのように一声高く吠えて息をひきとってしまいました。

現在、光前寺の本堂の横に、早太郎のお墓がまつられています。

また、早太郎をかり受けた弁存は、早太郎の供養にと《大般若経》を写経し光前寺へと奉納いたしました。この経本は現在でも、光前寺の宝として大切に残されています。

諏訪大社上社本宮

上社本宮は、幣拝殿と片拝殿のみで、本殿を持たない諏訪造りという独特の様式です。徳川家康が造営寄進したという四脚門など貴重な建造物が数多く残っており、六棟は重要文化財です。（建造物も四社の中で一番多く残っています）

幣拝殿（重要文化財）

四脚門（重要文化財）：1608年徳川家康が大久保長安に命じて建立したもの

境内のほぼ真中に東宝殿・西宝殿という二棟の茅葺の建物があります。本宮で最も大切な御社殿で、寅年と申年毎交互に建替えがなされ、遷座祭が行われます。軒からはどんなに干天の日でも最低三粒は水滴が落ちると言われ、七不思議のひとつに挙げられています。

神楽殿（重要文化財）

東宝殿

西宝殿

＜見どころ＞
・拝殿　・右拝殿、左拝殿
・脇片拝殿　・神楽殿　・四脚門
いずれも重要文化財

＜番外編＞

「四国霊場八十八カ所」勘請　信濃国塩田平札所巡り

約３００年前、塩田平の人の発想と努力で、四国八十八カ所霊場の巡礼がこの地でできるようになったお話しです。

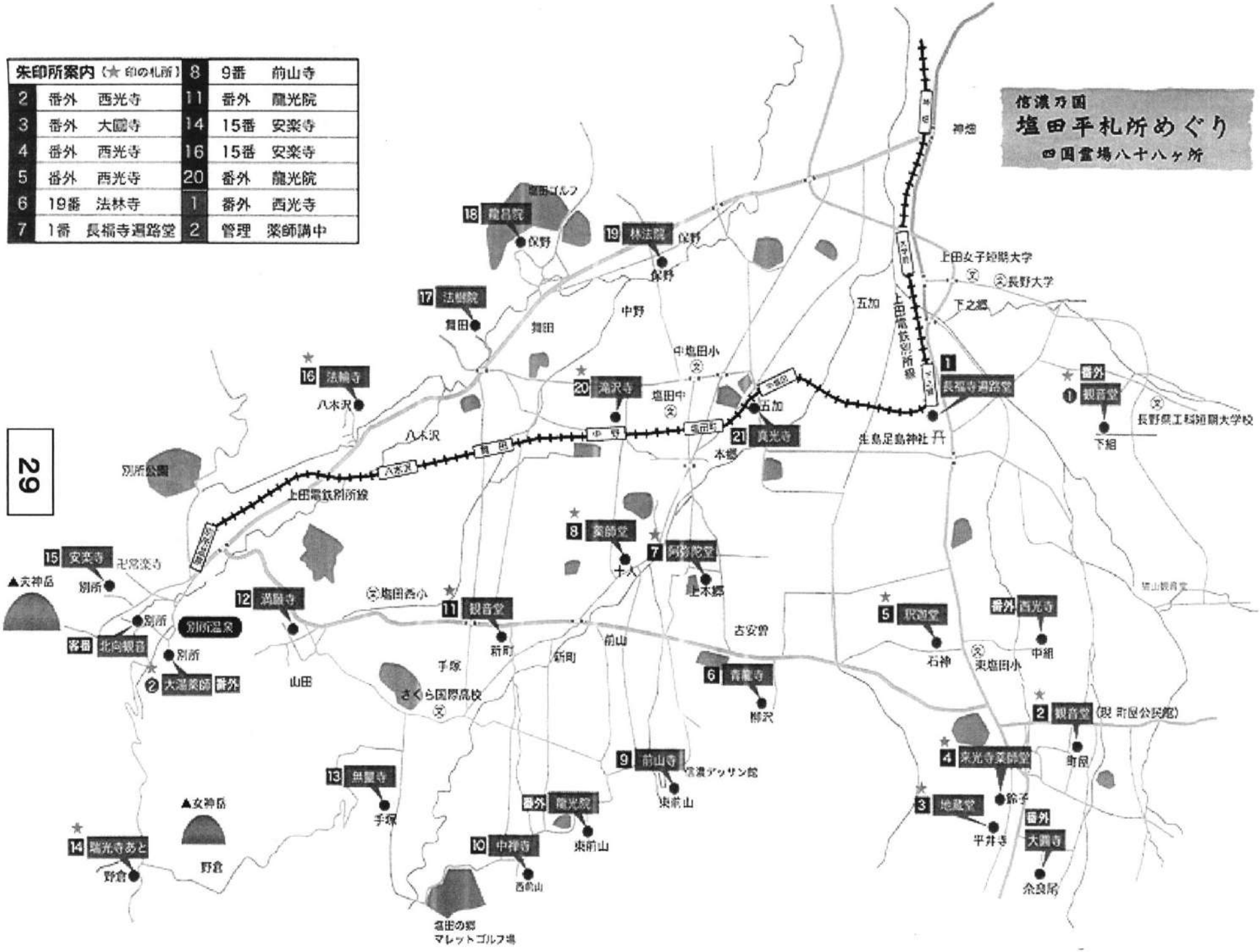
この地に住む人たちは日頃の貧しい生活に、何の支えもなく神仏にすがることで来世への希望を抱いていたという。四国八十八カ所例所霊場巡礼は憧れであった。しかし、ここに住む人たちにとって、四国は遠隔の地、途方もない時間と金がかかる。望んでも実現できるものではなかった。「いっそ四国霊場の仏をこちらへ迎えたらどうだろう」これこそ途方もない話であるが、熱心に四国の霊場にお願いし、ついに八十八体仏の勘講を許され仏像は京都の仏師にお願いし、晴れて塩田平に迎えることができた。元禄六年（１６９３年）のことである。明治の初めの記録では札所巡りとしての形は崩れていたようだが、近年、北条家の古文書に計二十一カ所の寺堂・仏像の名前が明記されていることがわかり、「塩田平札所巡り」が復興した。

信濃国一之宮　総本社　諏訪大社
『御柱祭』七年に一度の天下の大祭　御柱祭

樹齢１５０年を優に超えるモミの大木。山中から、選ばれた１６本のモミだけが御柱となり、里に引き出され、７年ごとの寅と申の年に諏訪大社の社殿の四隅に建てられます。宝殿の建て替え、そして御柱を選び、山から曳き、境内に建てる一連の行事を「御柱祭」と呼び、諏訪地方の６市町村の氏子たちがこぞって参加して行われます。

室町時代の「諏訪大明神画詞」という文献によれば、平安初期に桓武天皇の時代に「寅・申の干支に当社造営あり」と御柱祭についての記録が残されています。起源については諸説ありますが縄文時代の巨木信仰という説もあります。

御柱そのものは、長さ１７メートル、直径１メートル余、重さ１０トンの巨木。柱を山から里へ曳きだす「山出し」が４月に、神社までの道中を曳き、御柱を各社殿四隅に建てる「里曳き」が５月に行われます。

信濃乃国 塩田平札所めぐり
四国霊場八十八ヶ所

朱印所案内（★印の札所）			
2	番外　西光寺	8	9番　前山寺
3	番外　大國寺	11	番外　龍光院
4	番外　西光寺	14	15番　安楽寺
5	番外　西光寺	16	15番　安楽寺
6	19番　法林寺	20	番外　龍光院
7	1番　長福寺遍路堂	1	番外　西光寺
		2	管理　薬師講中